

自治大卒業生の声

自治大学校卒業生（修士課程連携特別研修（マスターコース））

兵庫県 西川 耕平

編集者注：本稿は、自治大学校における研修の特長などについて、自治大学校の卒業生が記したものです。

1 はじめに

私は、令和6年度の1年間を修士課程連携特別研修（以下：マスターコース）生として自治大学校で過ごした。

マスターコースは、自治大学校の寄宿舎に1年間入居しながら、大学院に通い、修士の学位取得を目指すコースである。

私が、県での自治大学校派遣選考の際、マスターコースを希望した理由は2点ある。

1点目は、私は経験者採用であるが、試験内容が面接・職務経歴書等によるものであり、いわゆる公務員試験（筆記試験）の勉強をしておらず、大学院で行政や法律に関わることを学びたいと考えたからである。

2点目は、妻が育休中であり、「仕事復帰するまでのタイミングであれば、1年間単身赴任で勉強してきてもいい。」と背中を押してくれたからである。

2 一橋大学国際・公共政策大学院（公共法政プログラム・1年コース）

私が通っていた一橋大学院の公共法政プログラムでは、約20名の学生とともに学んだ。学生は、国家公務員・地方公務員が約3割ずつ、残りは学部卒の学生、台湾や韓国の国家公務員等、様々なバックグラウンドをもっていた。社会人学生が多く、すぐに打ち解けることができ、多様な考え方を肌で感じることができた。

1年間で修士の学位を目指すことは、想像していたよりも大変であった。学位取得のためには、前期・後期の講義を受講する

ことで44単位を取得し、かつ修士論文を執筆する必要があった。

講義は、行政学や地方行政論、社会保障論など行政課題に対応する行政科目と、行政法や民事法などの法律科目を中心に受講した。教授陣は、学者だけではなく国家公務員などの実務家も多く、国の方針や課題を把握できたことは有意義だった。特に、政策法務研究という講義では、首相秘書官や知事などの話を直接聞き、質問をするという経験を通して、様々な立場の方の考えをダイレクトに感じることができた。

修士論文は、「都道府県職員における女性管理職登用率の要因分析」とのテーマを設定した。本テーマを設定した理由は主に3点ある。1点目は、国際的に見て日本の女性管理職割合（会社役員、企業の課長相当職以上、管理的公務員等）が低水準であるが、都道府県職員の女性管理職割合（課長相当職以上）においても同様の状況であり、自身が都道府県職員であることから、この状況に危機感を感じている。2点目は、優秀な女性の人材が行政組織の意思決定に力を発揮できるポジションにいないということは、地方行政や防災に多様な視点を活かせていない可能性がある。3点目は、地方自治体（都道府県）のデータや政策を基に検証している先行研究はなく、本テーマはオリジナリティがあったからである。

修士論文の構成としては、まずは、都道府県職員における女性管理職登用率の高い自治体（A県庁）と低い自治体（B県庁）について、公表データを基に要因分析を行った。その結果、重回帰分析による定量面と、政策研究などによる定性面について要因を特定した。

その上で、特定した要因の度合い等を確認するために、A 県庁及び B 県庁の人事課長に直接ヒアリングを行った。そして、最終的には、データ分析とヒアリング結果を踏まえ、都道府県職員の女性管理職登用率を向上させるためにはどのように取り組むべきか提言を行った。

私は、大学院において修士論文を作成することがマスターコースのメインであると感じている。特定のテーマを自身で設定し、作成にあたっては、担当教授や学生とディスカッションを繰り返し、無事に修士論文を仕上げる事ができた経験は大きな財産となった。

3 自治大学校

自治大学校では後期に 2 科目講義を受講した（マスターコースの指定科目）。グループワークなどで他の自治体の方の意見を聞くことができ、大変有意義だったと感じている。

また、自治大学校の図書館の存在が修士論文や講義の準備等の際に、心強かった。司書の方が親切で、私の修士論文に関わる様々な情報を提供してくださり、とても感謝している。

自治大学校では、主にマネジメントコース生と多くの時間を過ごした。談話室などで、仕事だけではなく様々な話をすることができ、楽しく貴重な時間だった。

4 おわりに

マスターコース生として過ごした 1 年間はとても充実していた。

一橋大学院では修士論文に向き合い、国籍を問わず多くの友人と知り合うことができた。自治大学校でも、様々な自治体の友人ができた。

私は子供が 6 歳、1 歳と小さかったこともあり、2 週間に 1 回、兵庫県に帰省しながら

ら 1 年間を過ごした。前期は金曜日夜間の講義後、終電で自宅に帰り、月曜日の始発で東京に向けて新幹線に乗りこむ生活であったが、後期は修士論文作成がメインであり、柔軟に勉学と育児の両立を図ることもできた。

最後に、現在仕事に戻ってから約 2 か月が経った。日々、目の前の業務に忙殺されているが、マスターコースでの経験を業務に繋げることを意識して取り組んでいきたいと考えている。



（香川県庁のマスター生と修士論文作成を行っていた自治大学校の一室からの風景）